
あの時君は

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの時君は

【Nコード】

N8911E

【作者名】

蒼

【あらすじ】

明け方、君からいきなり電話がかかってきた。――あの時、君の質問に僕は何て答えたのだろうか？

『死んだら私の中には何が残る？』

君が言った。

それは極最近言われたことなのか昔言われたことなのか、良く覚えていない。

けど、その日のことは良く覚えている。

確か、いきなり君に呼び出されたのだ。

そう、そうだ。

いきなり君に呼び出された。明け方ころ。携帯で。

その日は休日で、僕は夜更かしをしていて寝てから2〜3時間しかたっていないというのに夜が明けてすぐのころにいきなり鳴った電話で呼び出されたのだ。

『学校の近くの公園にすぐきて』と。

たぶん君じゃなかったら怒鳴り散らすか無視を決めこんでいただろう。

だけど君だったから急いで上着をはおって家を出た。

公園につくともうすでに君はいて、白いワンピース姿で佇んでいた。僕が駆け寄ると君は綺麗に微笑んで一番近くのベンチに向かって歩きだした。僕もそれに遅れないように歩きだす。

君が先にベンチに座って、その隣に僕も腰を下ろした。だが、君は一行に話だす気配がなくて沈黙だけが続いていた。それに耐えきれなくなった僕は「どうしたの？」って聞いたんだ。そうして返ってきたのがあの言葉だ。

『死んだら私の中には何が残る？』

僕は何て答えたのだろうか。その部分だけはどうしても思い出せない。

ただ覚えているのは僕の答えを聞いた後、またいつもの様に綺麗に

微笑んだ君の笑顔だった。

君と会ってから数日後、家に電話がかかってきて君が死んだと知った。

僕は知らなかったけど、だいぶ重い病気にかかっていたと言うことも聞いた。

そして僕と君が会った日。君はとても外出出来る様な体じゃ無かったと言うことも、聞いた。

あの時の君の気持ちは僕には分からない。

あの時の自分の気持ちも、今じゃもう思い出せない。

けど、これは僕のエゴだけど、どうかあの時あの瞬間が君にとって不幸では無かったと、最期まで幸せだったんだと思わせてください。どうか貴方の中に少しでも僕が残っていますように。

（後書き）

落ちも締めりも無い文章ですいません。最近投稿とか全然だったんで『もしかしてこいつ死んでんじゃねーの？』みたいに思っていた方がもしひとりでもいたら　　すいません。死んでませんでした。またたまにちょっとなら投稿したりするのでその時はお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8911e/>

あの時君は

2010年12月11日14時24分発行